

聖書：ヨハネの黙示録 18：9～24

説教題：この都のことで喜べ

日時：2021年8月8日（朝拝）

この18章では大バビロンのさばきについて語られています。大バビロンとは旧約聖書に出て来るバビロンがそうだったように、神を無視して自らを誇りし、人間に栄光を帰そうとするこの世の都市とその文化、またその社会やシステムを指します。黙示録が書かれた時代では、大バビロンとはローマ帝国の中心地、ローマの都に相当します。そしてここでは特に世界の歴史の最後の時代に存在する究極的な大バビロン、すなわち神を無視して自らの繁栄を誇る世俗的な大都市と人間中心の文化を指します。その大バビロンが今日の箇所最初の9節で「彼女」と言われているのは、前の17章で「大淫婦」と表現されていたことによります。大淫婦とは、その名の通り、人々を誤った道へと誘惑する存在のことです。まことの神への信仰から人々を引き離し、誤ったものを神としてあがめ、追い求めるように仕向ける。特にこの世的な繁栄を示して、こちらにこそあなたを幸せにするものがあると人々を誘って神から引き離し、迷わせる。それが淫行のぶどう酒を飲ませるという表現で語られました。しかしその大淫婦・大バビロンがさばかれるという話がここでなされています。そのため、彼女に引き付けられ、彼女に信頼を置いて来た人々が大いに慌てて泣き悲しむことが今日の箇所に述べられています。

まず出て来るのは9節の地の王たちです。彼らについて「彼女と淫らなことを行い、ぜいたくをした地の王たちは」とあります。3節で見たように、「淫らなこと」とは性的不品行のことではありません。これは霊的な淫行、すなわちまことの神から離れて、大淫婦に誘惑されるままに歩んだ姿を指します。当時で言えば、世界の都ローマこそ、我々に幸せをもたらし、我々を祝福してくれる都だとあがめて、そのローマとの結びつきを何よりも求めることです。「地の王たち」とは世界各地の首長たち、リーダーたちを指しますが、彼らは積極的にローマ皇帝が求める皇帝礼拝を推進しました。黙示録が宛てられたアジアの町々も皇帝のための神殿を競って建てようとしていました。そうしてローマに忠実な町として名をあげれば間違いなくその町は繁栄します。経済的に豊かになり、ぜいたくな生活ができます。その彼らは自分たちが淫らなことを行った彼女が崩壊するのを見て、泣いて胸を打ち叩き、言います。10節：「わざわいだ、わざわいだ、大きな都、力強い都バビロンよ。あなたのさばきは一瞬にしてなされた」

と。

2番目のグループとして出て来るのは、11節の「地の商人たち」です。彼らも大バビロンとのつながりによって大きな利益を受けて来ました。12節と13節には彼らが扱っていたぜいたく品のリストがあります。実際に当時のローマとの間で行き来していた高級品の数々です。一つ一つ解説する必要はないかと思います。このリストで私たちの目を引くのは最後に「奴隷、それに人のいのち」とあることです。ここで人のいのちが商品のように扱われています。モノ同然に扱われています。あるいはこれはこの取引は、ある人々のいのちを犠牲にすることの上に成り立っているということを示すものかもしれません。それゆえ14節で、おまえの欲しがるものはお前から遠ざかり、ぜいたくなものや華やかなものはすべておまえから消え失せるといふさばきの下ることが宣言されます。そこで商人たちは、先の地の王たちと同じように「わざわいだ、わざわいだ」と泣き悲しみます。16～17節で彼らは言います。「わざわいだ、わざわいだ、大きな都よ。亜麻布、紫布、緋色の布をまとい、金、宝石、真珠で身を飾っていたが、あれほどの富が、一瞬にして荒廢に帰してしまった。」

3番目のグループは船長や海で働く者たちです。当時の流通は特に海を通してなされました。商人たちの取引に、船とそこで働く人たちは欠かせません。そこでその彼らも大きな利益を得ていました。彼らも大バビロンがさばかれ、焼かれる様子を見て悲しみます。「これほどの大きな都がほかにあったらどうか」と。そして頭にちりをかぶり、泣き悲しんで言います。「わざわいだ、わざわいだ、大きな都よ。海に船を持つ者たちはみな、ここでその繁栄から富を得ていたのに、その都が一瞬にして荒れ果ててしまうとは。」

このように大バビロンがさばかれる時、様々な人々がうろたえ、嘆きの声を上げます。しかし人々は何を悲しんでいるでしょう。彼らは大バビロンのさばきを前にして、自らの生き方を振り返り、悔い改めへ向かったわけではありません。彼らが悲しんだのは、これまでと同じようなぜいたくな生活ができなくなるからです。経済的な祝福が得られなくなるからです。もっと大事なこと、すなわちこれは彼女と淫らなことを行って来たことへの神のさばきだということには思いが向かない。彼らの関心は自分たちの収入のことです。経済生活のことです。その破綻を悲しみ、今後の生活がこれまでと同じようには行かないことを悲しみ、良からぬ将来が自分たちに待っているだ

ろうと予期して恐れに包まれるだけです。また彼らをうろたえさせたのは、このさばきが「一瞬にして」起こったからです。大バビロンは、バビロンの上に「大」という言葉がついているように、そう簡単には崩れない偉大なものという人々の信頼と自信を表しています。ところが彼らの想像を超えて、大バビロンは一瞬にして倒れます。あっという間にそのことが起こります。神のさばきはそういうものであることをこれは示しています。神に基礎を置かず、人間の力で、人間中心に作り上げたこの世の都市文化や様々なシステムは、いくら今華やかに見え、光り輝いているようでも、あっという間に終焉の日を迎えることとなるのです。

さて、この大バビロンのさばきを前にしてもう一つの反応があるというのが 20 節以降です。20 節：「天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」これは神に信頼して、大淫婦が提供する淫行のぶどう酒を飲まず、大バビロンが幅を利かせるこの世では苦難を強いられて来た神の民に対する慰めのメッセージです。彼らが待ち望んだ救いの日、神の正義の実行の日がついに来た！ということです。どんなさばきがなされるかが 21 節以降に記されています。まず 21 節で、一人の強い御使いが、大きいひき臼のような石を取り上げ、海に投げ込んで言います。「大きな都バビロンは、このように荒々しく投げ捨てられ、もはや決して見出されることはない。」大きな石が海に投げ込まれたら、それは大きな音を立てて沈み始め、二度と上に上がって来ません。つまり大バビロンはこのように永遠の裁きを受けるということです。また 22 節以降には、彼らが味わって来た様々な地上的祝福が一切剥ぎ取られることが述べられています。22 節の「豎琴を弾く者たち、歌を歌う者たち、笛を吹く者たち、ラッパを鳴らす者たちの奏でる音」とは、人生の楽しみを象徴します。その音が一切聞かれない状態になる。また「あらゆる技術を持つ職人たちも、云々」とは、以前の彼らはそのように、この世で仕事を持ち、稼いでいたことを表します。しかし石臼の音も聞かれることはなくなる。さらに、ともしびの光も輝くことはなく、花婿と花嫁の声も聞かれなるとあります。つまり華やかな生活も、愛の喜びの声も聞かれなくなる。ある学者は、これはこの世の人々が聖徒たちに行った仕打ちが、そっくりそのまま報いとなって自分たちに帰って来るというさばきを表していると言っています。前回見た 6～7 節でそのことが示されていました。神は大バビロンが聖徒たちに行った通りのことを大バビロンに返すという仕方で正義を行われると。つまり 22～23 節にあることは、聖徒たちがこれまで受けて来た苦難を振り返っているものでもあるということです。信者

たちは皇帝礼拝を行わず、同業者の組合の神を礼拝することもしなかったため、社会から疎外され、経済的に厳しい状況に置かれたことをこれまでも見て来ました。つまりそういう彼らは 22 節に表現されているようなこの世の楽しみを経験することはできなかつた。世の人々は「豎琴を弾く者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の奏でる音」を楽しんで生活しましたが、信者たちはそのような生活とは無縁であった。また聖徒たちは同業者の組合（ギルド）に加わることができず、たとえ技術を持っていても、その働き場は与えられませんでした。またその生活はともしびの光が輝く生活ではなかつたし、結婚の祝いを喜び楽しむような日々ではなかつた。しかしそのように彼らが強いられて来た苦難を、神は大バビロンに属する人たちに返すのです。「目には目を、歯には歯を」の原則で。他の人々をそのような状況に追い込んだ彼らは、今度は自分たちがそうされるといふ報いを受けるのです。神はこうして正しいさばきを実行されるということです。

最後 23 節後半から、大バビロンがこのようにさばかれる理由が 3 つまとめて記されています。23 節真ん中の「というのは」という言葉で始まる以降の文章です。一つ目は「おまえの商人たちが地上で権力を握り」。一見、これのどこが悪いのかと思うかもしれませんが、商人たちが、その働きを通して、ある種の権力を握るのは自然のことではないかと。しかしこれは文脈から分かりますように、神を無視し、自分が権力者であるかのように振る舞う姿を非難するものです。今日の箇所と深い関係にあるエゼキエル書 28 章 4~5 節にこうあります。「あなたは自分の知恵と英知によって富を築き、金や銀を宝物倉に蓄えた。商いに多くの知恵を使って富を増し、あなたの心は富のゆえに高ぶった。」そして 6 節：「それゆえ、神である主はこう言う。あなたは自分の心を神の心のように見なした。」また 9 節：「あなたは、人であり、神ではない。」今見ている黙示録 18 章の 7 節でも、大バビロンは「私は女王として座し、云々」と高ぶっていたことが示されていました。一方、この黙示録が示しているのは、これとは反対に、ただ神に栄光を帰し、またそこにおいて最高の喜びを見出すという生き方です。4 章 11 節で 24 人の長老たちはこのように神を賛美しました。「主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」また 7 章 12 節で御使いたちは賛美しました。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」あるいは 15 章 2 節でガラスの海のほとりに立つ神の民はこう賛美しました。「主よ、全能者なる神よ。あ

あなたのみわざは偉大で、驚くべきものです。諸国の民の王よ。あなたの道は正しく真実です。」 また次回 19 章 1 節で大群衆の大きな声のようなものが、こう言うのを私たちは見ます。「ハレルヤ。救いと栄光と力は私たちの神のもの。」 しかし大バビロンに属する人々は自分に栄光を帰し、自分の業績を喜びとします。このように人間をすべての中心に置き、神を忘れて高ぶることは、さばきに値する最も根本的な罪であるということです。2 つ目の理由として 23 節最後に「おまえの魔術によってすべての国々の民が惑わされ」とあります。魔術とは何かと私たちは気になるかもしれませんが、強調点は「惑わした」という方にあります。つまり人々をまことの神礼拝から引き離して、偽りの道へ導いたことです。この世の華やかさや見せかけの豊かさで人々を惑わしたことが「おまえの魔術によって」と言われているだけです。そして 3 つ目は 24 節にある通り、「この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたから」ということです。つまり神の民を苦しみに追いやり、迫害したことです。以前、6 章 10 節で苦難にあった聖徒たちの次のような祈りがささげられていました。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさないのですか。」 この祈りに神はついに答えてくださり、彼らに喜びをもたらしてくださるのです。

以上の箇所から学ぶことは、大バビロンは必ずこのようにさばかれるということです。ただのバビロンではなく「大」バビロンと自らを誇るこの世の大きな都がそうなる。ですから今、私たちの目に揺るぎないものと見えるものであっても、それがもし神から離れて高ぶっているなら、また人間中心の文化なら、最後はみなこの結末に至るということです。それに信頼する者たちは、今日の箇所に出て来た人たちのように、やがて大いに幻滅し、嘆きの声を上げることに至る。ですから私たちはこれと同じ道を行かないように！大淫婦に誘惑されてこのこついで行き、淫行のぶどう酒を飲むことがないように！その魔術にだまされないように！むしろ 4 節で「彼女のところから出て行きなさい」と言われたように、世と調子を合わせるのではなく、真に行くべき道を選び取る者でありたいと思います。そして思うことは、たとえ主に従うことを第一とするがゆえにこの世で困難にあうことが多くても、その道に行く人こそ幸いであるということです。神は必ず正しいさばきを最後になさり、私が失ったものを取り返してくださる。決して見過ごしたままにはされない。ですから私たちはこの世の人々に倣って歩むのではなく、私たちの行く所どこにおいてもまず神を認め、神に信頼し、その神に従う生活によって神の栄光を現し、また神を私たちの何よりの喜びとする歩

みへ進みたいと思います。その人にはついに今日の箇所が語る日が来ます。「この都のことで喜べ！」と言われる日が来ます。すべての涙が拭われる日が来ます。その日を見つめて様々な誘惑の中でも信仰において妥協せず、主の道こそを進み、ついに主によって豊かに、永遠に、報われ、祝される歩みへ進む者とされたく思います。